巻頭言

堀　了平
近畿大学薬学総合研究所教授、京都大学名誉教授

ヒマラヤ学誌第４号の発刊にあたり、一言、所感を述べさせていただきたい。ヒマラヤ学誌も、はや４号を数えるまでになった。本誌第１号・第２号として編集された京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊（代表：戸部隆吉教授）の研究成果に対して、昨年度第２８回秩父宮記念学術賞が授与された。第３号とこの第４号では、その後さらに世界各地に展開し継続しているフィールド医学を核とした調査研究の報告がなされている。

本号は、京都大学ヒマラヤ医学学術調査計画の第６次隊（フンザ・カラコルム）、第７次隊（アンデス）、第８次隊（ネパール・クンブ）の成果を特集している。とくにアンデス隊（松林公蔵隊長）は、南米エクアドルのビルガバンバならびにボリビアのチチカカ湖周辺のインディオを対象に、南米アンデス高地にフィールド医学研究を展開した新しい試みである。なお隊の正式報告書が、高知新聞社より別途刊行される予定である。参照されたい。

１９９３年度より３年間、文部省科学研究費・海外学術調査が認められた。これによって１９８８年以来継続して科学研究費を受けてきたわれわれの研究プロジェクトが、むこう３年間さらに大きく展開できる強力なドライビングフォースを得た。実際、本年９３年には、トヨタ財団等の助成も得て、ブータン、モンゴル、フンザ・新疆で、新たな研究が展開した。その成果は次号に報告されるものと期待している。私自身、こうしたプロジェクトと深く関わることができたことを心から良かったとつくづく思っている。

思い返せば、１９８８年当初は、京都大学学士山岳会（ＡＡＣＫ）の当時の会長として、松沢、河合、松林、瀬戸、古川たちの、学問と登山を融合させた新しいスタイルの登山への夢を実現させてやりたいと思った。その気持ちからスタートし、文部省科学研究費による研究班の班員となることを承諾し、さらに戸部教授の後をついで代表者まで引き受けるところとなった。とくに、１９９０年第３次隊（シシャパンマ隊）による８０００ｍ峰の大量登頂と高所医学研究の新展開は、このプロジェクトを輝かしいものとして位置づけた。また私個人にとっても生涯忘れることのないすばらしい経験となった。

「二兎を追うもの、一兎も得ず」という諺がある。私の場合、大学院に進むにあたり教授と話しあった。そして、薬学と言う実験科学の性格上、山という一兎をあきらめざるを得なかった。以来、ヒマラヤへの夢は私の中で長らく冬眠を続けてきた。１９８５年、京都大学山岳部のブータンヒマラヤ遠征隊の隊長に推され、マサコン峰の初登頂に成功した。

まさに、冬眠から私を目覚めさせる春の陽ざしであった。次いで１９９０年のシシャパンマ隊への同行は、緑濃いブータンと比べて、広大なチベット高原の風景に現わされるように、きらめく夏の陽ざしであった。そして本年は、フンザからクンジェラブ峠を越えて新彊ウイグル自治区に抜ける隊に参加の機会を得た。アプリコットのたわわにみのる、荒涼とした乾燥の地を旅した。これで、ヒマラヤを東部、中央部、西部とひととおり見たことになる。

私自身は自分の体をヒマラヤの岩壁や氷壁にぶつけることはできなかった。しかし、ベースキャンプのテントの中で若者たちの動きを見守りつつ、遠征登山と研究とは、つくづく似たところがあると実感した。周到な調査と準備、綿密な計画、的確な判断と臨機応変の作戦、そしてノイエス。加えて何よりもその底辺にロマンの有ること。登山も研究も、ロマンがあってこそ成り立つ。そこがきわめて良く似ていると思う。その意味では、この「ヒマラヤ学誌」は、その二つを融合させた素晴らしい試みだといえるだろう。もちろんまだ未熟な点は多々あるが、本誌には、新しい物を産みだそうとする将来への希望がある。

かつて登山と研究は、まったく独立した二兎に私には見えた。しかし、それはロマンとアプローチの点では、じつは同じ一兎であった。ここに集う若い人々の志を大きく花咲かせ、このプロジェクトをぜひ実りあるものに育てたい。

なお、本号の編集・刊行にあたっては、社団法人・京都大学学士山岳会（高村泰雄会長）から多大なご協力を得た。記して感謝申し上げたい。